

家族の問題と解決

地域に暮らす人たちにできること

認知症リンクワーカー・フォローアップ研修

仕事場DAN／立命館大学大学院

団 士郎

自己紹介

漫画家

家族相談カウンセラー

大学院教員

それらを合せたお話を

家族支援

結論から述べると「家族理解」に尽きる

「理解」こそが援助

**大きな問題や事件は
どこで発生しているのでしょうか？**

問題/事件は

**「誰にも理解されなかった人」
の ところで起きていることが多い**

**だけれども一方で、
人は自分のことは
できるだけ自分でしたいもの**

**代わりにしてあげる援助/支援は
そんなに素晴らしいことではない
私はそう考えている**

選べない日々

in the shade of family tree

木陰の物語



団 士郎

五〇歳近い
独身の長男が、
病身の両親、
ことに父親に
辛くあたる



「腕が痣になつていたりして、あれは虐待よ」

ヘルパーで入っている人が、何とかならないものかと訴えている



酷いわネ

奥の親えしよ

などと聞こえてくる



私が相談を受けたわけではないが
聞こえてしまうので、頭の中で思
いめぐらす



どんな地域
なの？

兄弟は
あるのかな？



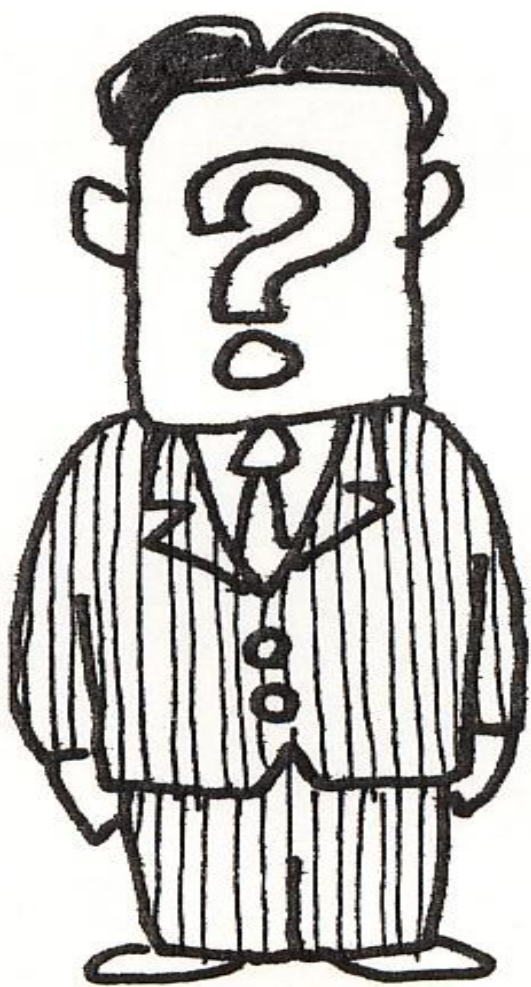
すねかじり



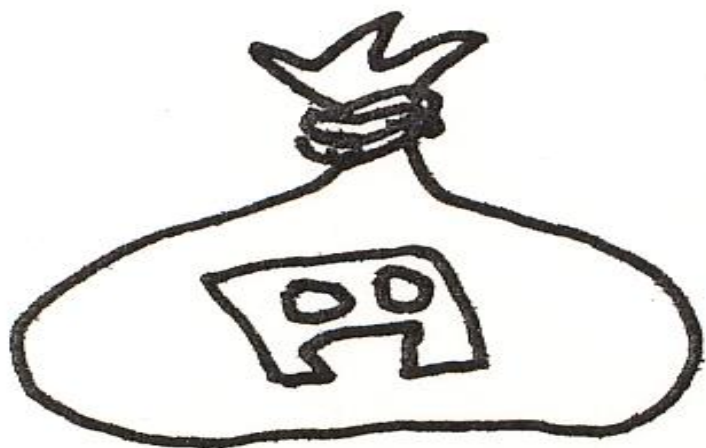
それなら決断できなかつた親子、
どっちもどっちだ。

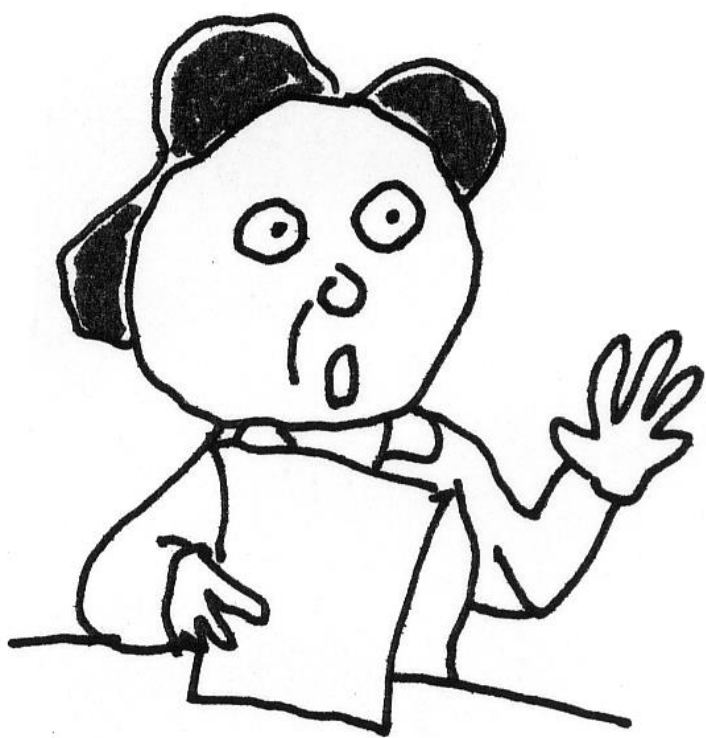
ひよつとして長男には、障害か病
気でもあるのか？

仕事は何をしてるんだろっ？
どうやって



家計は
成り立って
いるのか？





疑問がふくらみすぎたので、
「ちよつといいい？」
と話しかけた



七〇代半ばの両親と四八歳の長男。三人弟妹だったが弟は就職をして、結婚して家を出ている



妹も短大卒業後、就職で家を出て結婚



その後離婚して一時実家に戻って
いたが、現在は市内にマンション
を借りて一人暮らしをしている



「ご両親はどうされたの、
病気って？」

母が脳梗塞で
倒れたのは
六〇代の前半。
現在、自分の
ことぐらいはできる
状態だという



父が脳溢血で倒れたのは七〇歳。
半身マヒが残って車椅子使用



リハビリを
言われても、
なかなか
聞き入れようと
しない



長男は高校卒業後、
市役所に勤務。

両親が、思うように
動けなくなつた今、
兼業農家の主である

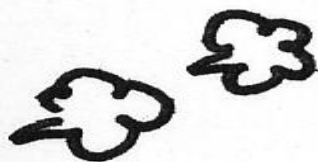
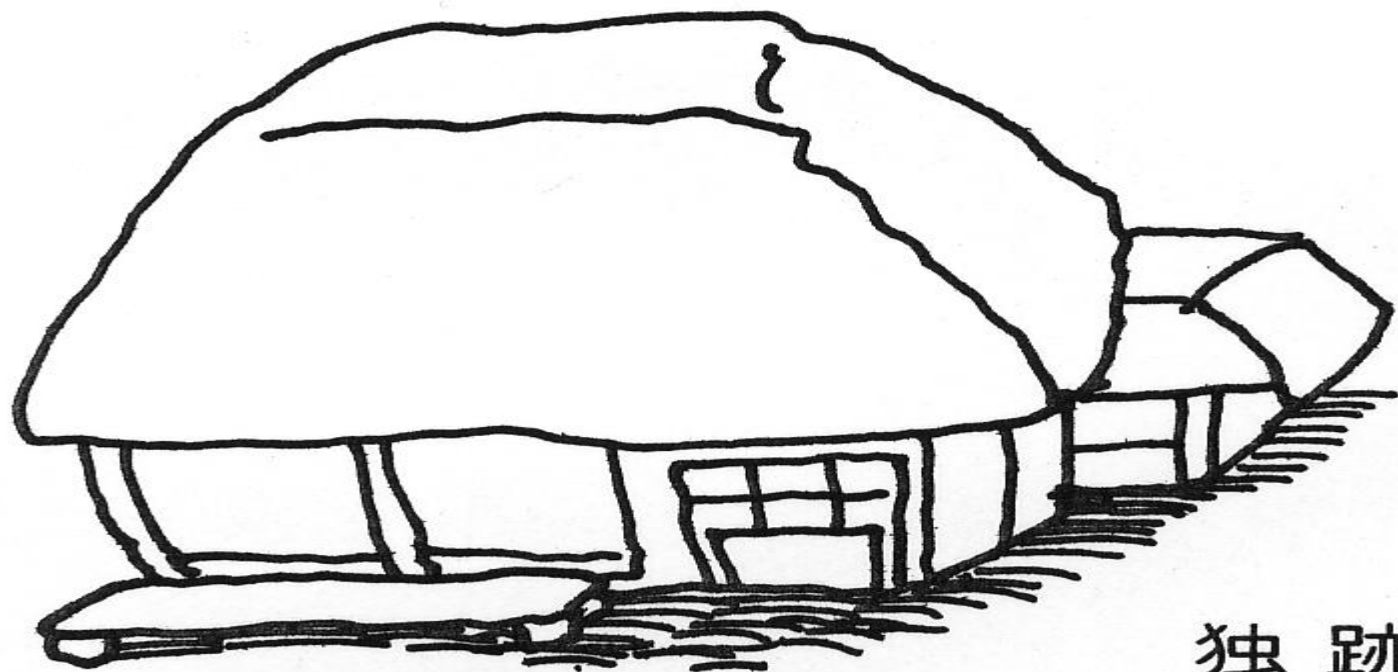


当時から農家の嫁に行っても
よいという女性は少なかった



弟妹は家を出ることと交換に
それぞれ学校を卒業
させてもらって独立した





跡取りの長男が、
独身のまま残された

市役所に

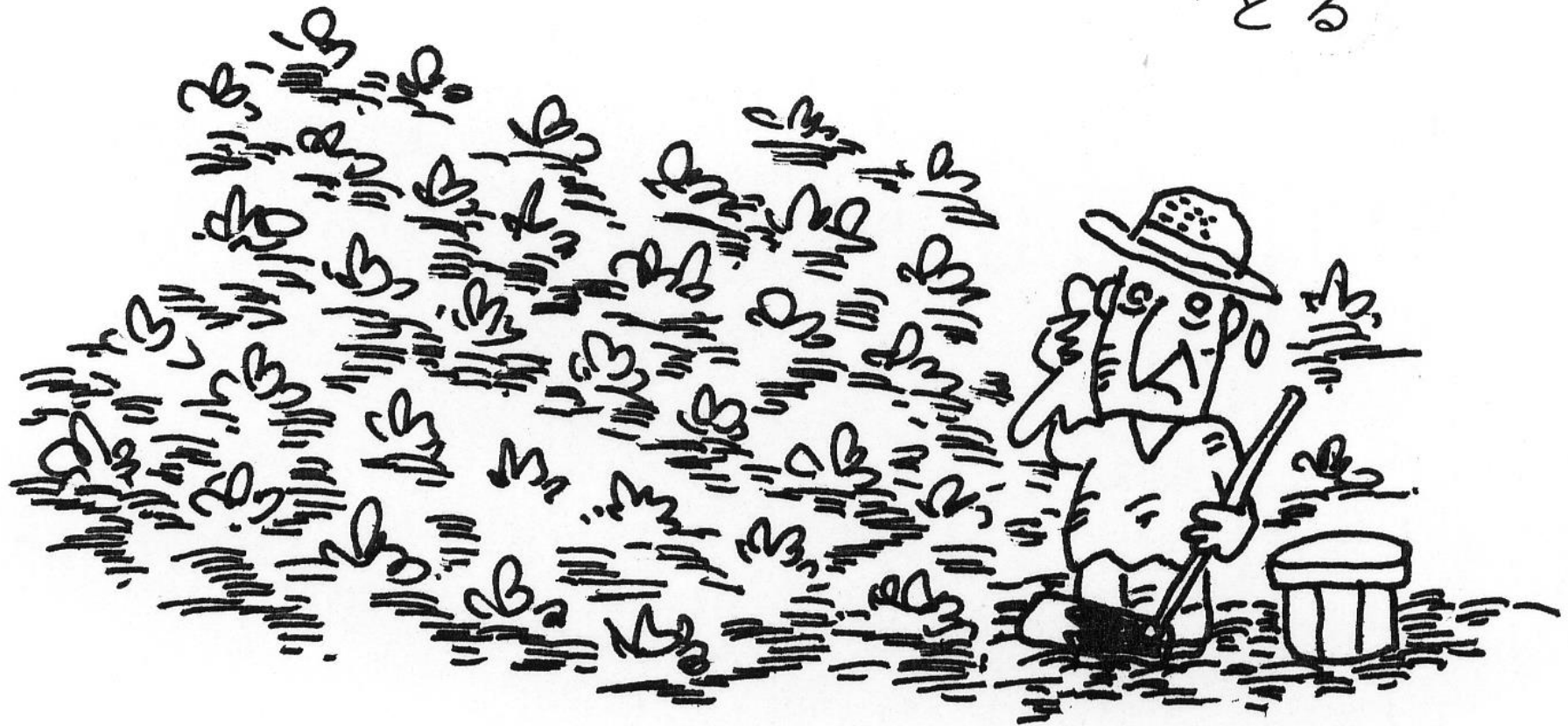
勤めて30年、

不本意もいっぱい

あったに違いない



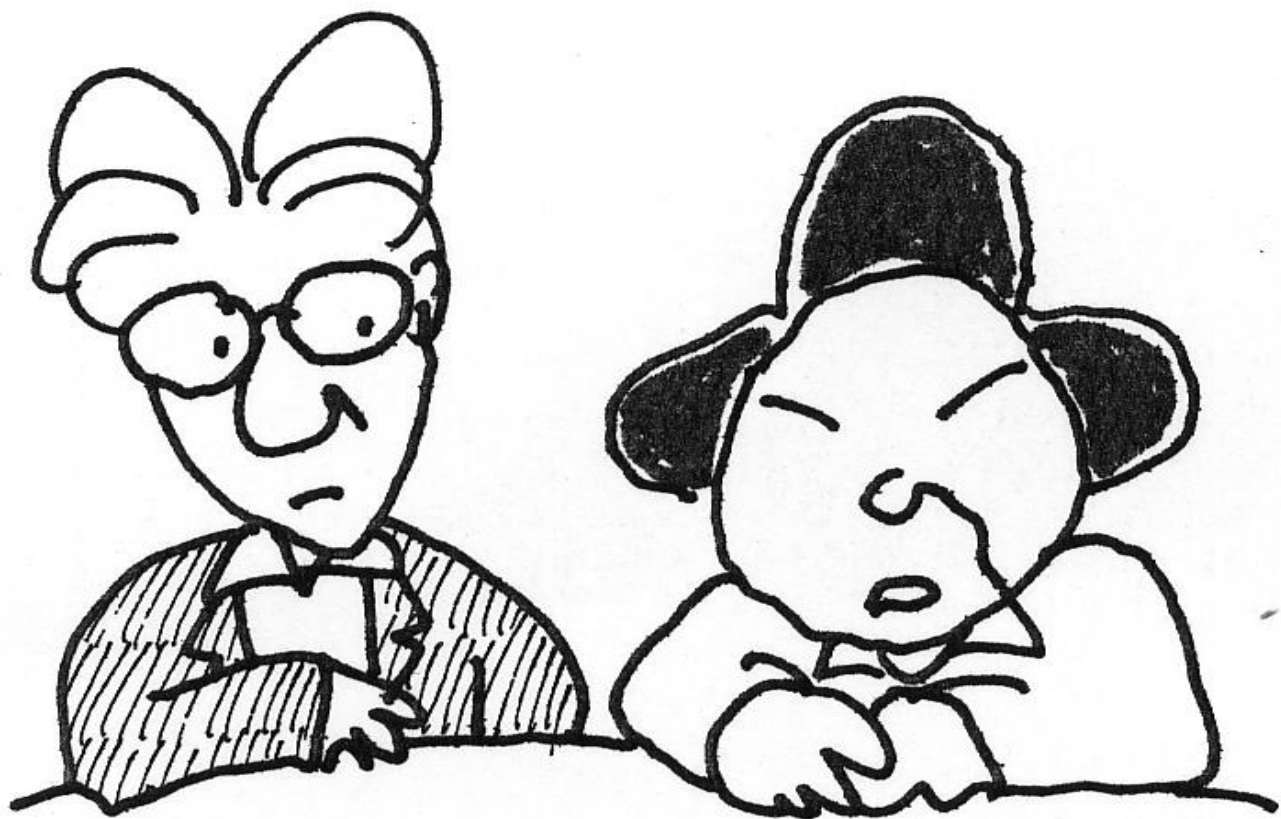
相続するより
気軽に出ていける
弟妹を羨ましいと
思ったことも
あつた



母親が倒れて
十年



頑張ってきた人が、ヘルパーさん
に「虐待だ!」と言われている



父親には元気でいてもらいたかつ
たに違いない。病で倒れた側も大
変だが、長男にもやり場のない
苦悩だっただろう



その父親が車椅子に頼り、世話し
てくれる人に頼り切ろうとした





もう一度
父親が、
自分のことは
自分でできるように
と長男は
厳しくした





それを
弟妹からも
虐待だと
言われた

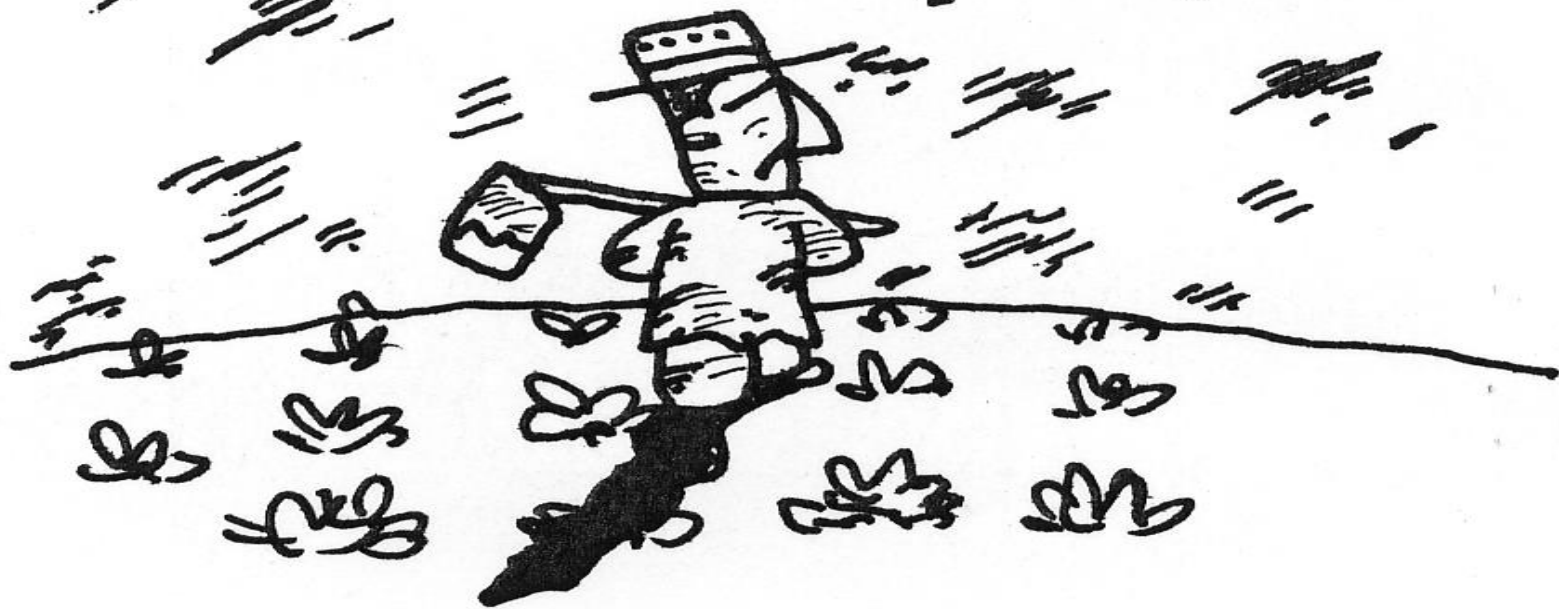
そうなのかもしれない。しかしな
あとも思う。頑張ってきた人が責
められている





わかってもらえることの少ない、
選べなかった日々を過ごす人が
たくさんあるにちがいない、

そういう
人達がみんな、
今日も
黙って
働いている



おわり

**お隣の方と感想を
話し合ってください**

これは実話です

新潟県の若い男性ヘルパーが
ケース検討にと出したものです

ここのテーマは「**家族**」

けっして症状だけではない

だから、認知症だけに関わる家族もない

長男を責めることで、 手に入るモノは何か？

地域の児童虐待通報にも、似たことが

誰が適切で、誰は不適切か

そんなジャッジは何ももたらさない

理解は声かけや、側に行って、

ねぎらうことから

「家族の構造」

考え方

「家族の構造理論」

本の紹介

「家族理解入門」中央法規出版

月刊「ケアマネジャー」連載分

この家族のケースは
p19、20に解説している
音読

この家族に今できる外からの提案は
「ご兄弟で集まって話し合ってみられませんか。
ご一緒させていただいても良いですよ」

合同家族面接

ところが近年

気をつけないと、地域社会は
意地悪な評論家になってしまう。

今、日本社会もそう
社会が貧しくなっている

**ご近所での
「お互いさま」の組み立ても、
難しくなってきた**

地域社会はずっと、このテーマで揺れている

知らない人同士の町

知り合う機会を形成できない社会

そこに直ぐ専門家が介入

故郷

木陰の物語



一軒の廃屋がある



ここにはかつて両親と五
人の子どもたちが暮らして
いた。



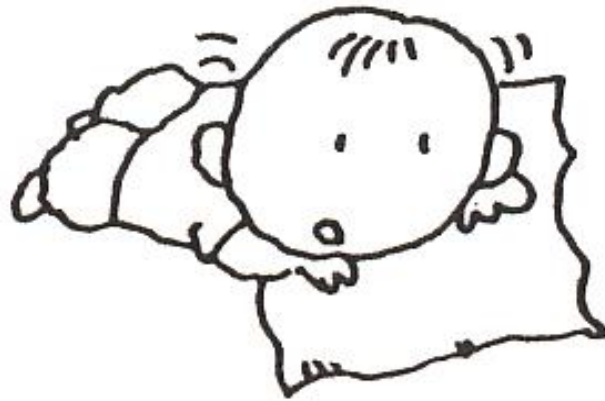
父は役場に勤めながら農
業をしていた。



母は子育てに大わらわの
毎日だった。



少し年の離れた末っ子の
ムスブ。上の子たちに比べ
ると、何かにつけて遅いの
が母の心配だった。



一才半健診では経過観察
が必要だといわれた。



都会の大学病院にも足を
運んで診察をうけた。一年
後、また様子を見せにこい
と言われたただけだった。



定期的に検診に通うよう
になって、ムスブの発達に
遅れがあるのではないかと
不安になった。





それでは済まないと
思った。



両親はあちこちの相談室
や発達クリニックを訪れ
た。一才から一才半ほどの
遅れがあると言われた。三
才になっていた。



上四人の子たちは元気に
成長した。



高校、大学と節目節目に、
家を離れて都会に出た。



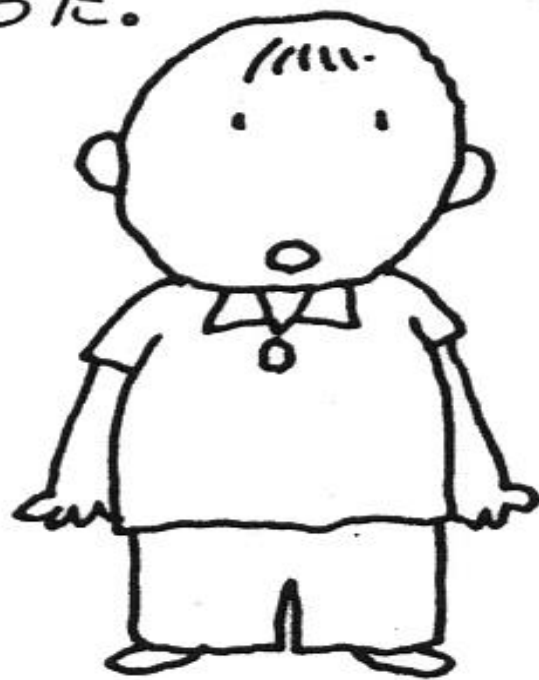
長男が就職の時期を迎えたとき、もしムスブがいなかったら



よく考えもせずに、こう
言ったかもしれない



しかし、「長男なんだから、自分たちのいなくなった後も、ムスブを一生面倒見てやってくれ」とは言えなかった。



そんな風に息子の人生を
縛りたくなかった。だから
長男には



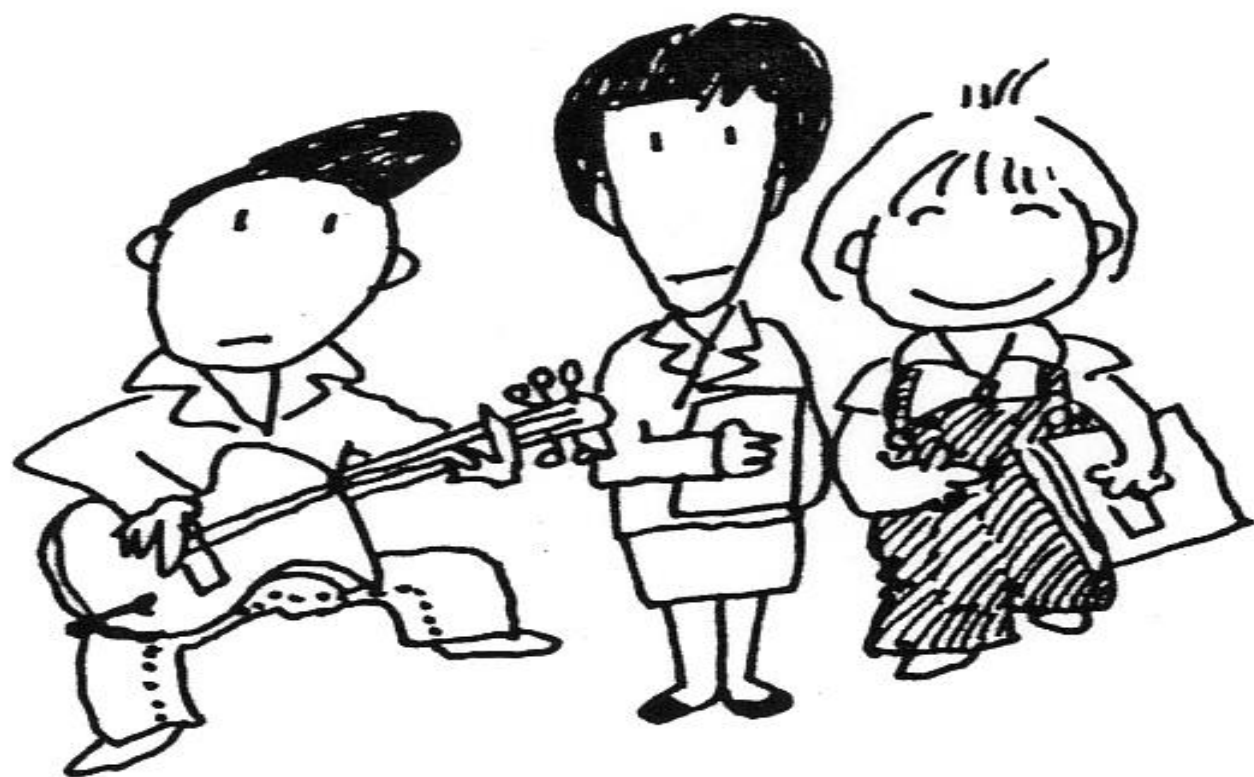
田舎に戻って
きても、なかなか
就職は
ないからナ...

と話した。

母親には、「二人でやれるだけ頑張ってみよう」といった。



次男にも、長女、次女にも、同じように、自分の意志での選択を認めた。

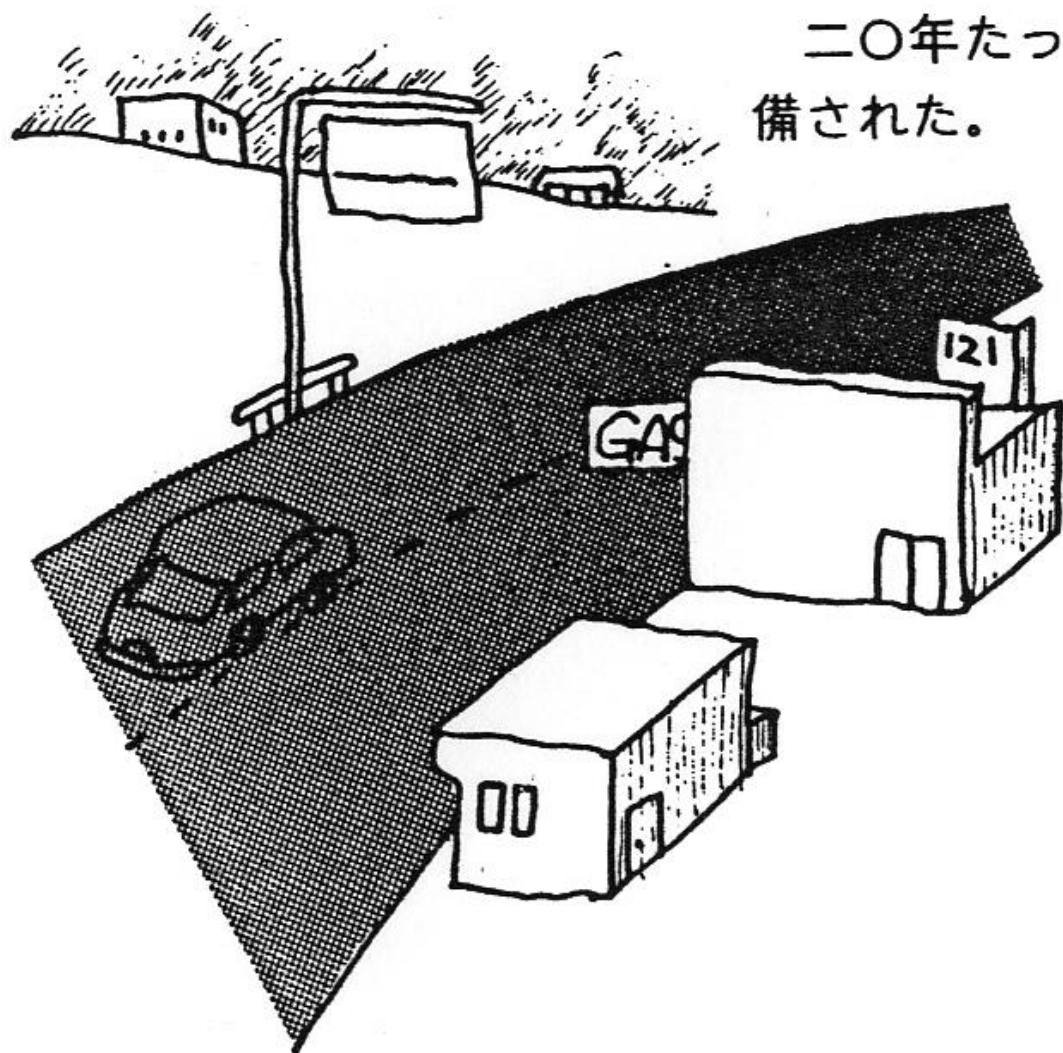




一人くらい
田舎にもどって
自分たちの老後や
弟の面倒を
みてくれるか...

とは一度も言わなかった。

二〇年たった。道路も整備された。



その気になれば、近隣の
都市の大企業にも通勤可能
になった。



都会で住宅を手に入れる
より合理的だと、Uターン
してくる人も増えた。



しかし、ムスブ達の家は
もうない。



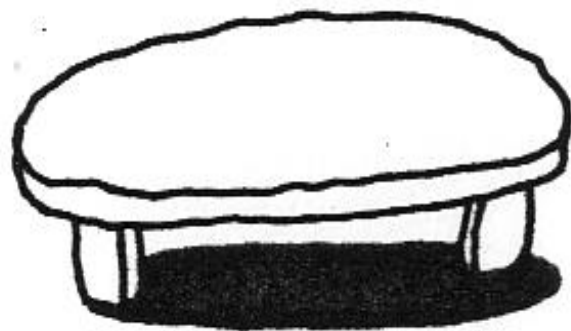
山間の美しい村にまた夏
がくる。



田舎のお爺ちゃん、お婆
ちゃんを訪ねて、都会暮らし
の孫たちがやってくる。



だが、ムスブの一家が集
うことはもうない。





突然、父が亡くなった時、
葬式に集まった兄弟姉妹は
話し合った。



当然それぞれが今の暮らしの事情を抱えていた。

何もかも引き払って、一家で故郷に引っ越してこられる者などなかった。



母はそんなことを誰にも
求めなかった。ムスブと二
人、静かに暮らした。



それが崩れたのは、母に
ボケの症状が出始めたから
だ。



心配した役場の福祉担当者
は、兄弟に連絡して協議
した。



しかしそれぞれの生活事情は、一層動かし難いものになっていた。母とムスブの世話を、誰に強要できるものでもなかった。



農地は手放され、家は主
を失った。



四人の兄弟たちは里帰り
する故郷を失った。



今、母は特別養護老人ホームで暮らしている。



ムスブも少し離れた施設
で暮らしている。



兄弟達もみな、それぞれの
の場所で、家族に囲まれて
暮らしている。



父の墓だけが今も、美しい村の高台にある。墓参りも希になった。



すっかり老け込んだ母
が、ホームの縁側で、毎日
じっと遠くの山裾を眺めて
いる。



おばあちゃん
毎日、なほを
見るん
でさー

老女は何も答えない。

あの山の麓にかつて、家族七人のにぎやかな暮らしがあった。

これで良かったのかどうか。そんな自問自答があるのかどうか・・・、誰にも窺うことはできない。

また、感想を3分

子育て/自立/高齢化/介護

普通に暮らしていても、課題はやってくる。
親は歳を取るし、子どもは自立してゆく。
してくれないと困る。

でも、老後に誰も居なくなってしまうのも…
どうするのが良いのか、悩ましいところです。
そこに時には大きな被災が重なる。

意見ではなく、**現実**が被さってくる

正しい一つの答など 誰も持てない

ここが「医療問題」とは異なるところです

誰にもできて、誰も正解など持ち得ない

だから、それぞれが自分自身で
取り組めるように支えるのが
一番良いのかなと・・・

最後にマンガ本の宣伝
「家族の練習問題」 1 & 7
1400円を1000円で

おわり